
無責処（セメルトコロナシ）

石崎京悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セメントコロナシ
無責処

【Zコード】

Z8269A

【作者名】

石崎京悟

【あらすじ】

阿部が会社に入ると、新人の有村が謝っていた。何事かと話を聞いてみると、そこには迷惑な荒事とその裏に切ない事実が隠れていた。

(前書き)

読みにくいかもしれません。リクエスト次第で改行や文章を調節します。

京都の紅葉も終わり、朝から身震いするのは当然の季節となつた。

そんな日常の中。阿部は早くから、彼女の怒鳴り声で起こされた。

昨日の疲れが残つた体は寝覚めが悪く、機嫌もよくないのだが、彼女はお構いなしに耳元で声を荒げる。滅多なことでは怒らない彼女が、寝起きにいきなり説教しだすとはよほどの事情か。阿部は眠気を我慢して耳を立てたが、原因はどうやら自分の寝相らしい。話を聞くに、阿部が掛け布団を独り占めしてるとこいつ内容だった。布団どころか毛布まで奪われ、自分がとても寒い思いをしたと、おかげで寝冷えしてしまつたと不満をぶつけてきた。それなら取り返したらよかつたのに、と阿部は思う。だが、口に出す前に、力が強くて取り返せなかつたと、答えが返ってきた。なんとか許してもらおうと謝るが、彼女は仮頂面のままで部屋の外へ着替えに行つた。出でいく最後まで謝る阿部だが、意識のない自分がやつたことを謝るのはなんだか妙で、それでいて自分のやつたことだから、謝らなくてはと思う。その奇妙な感覚を、いつのまにやら冷めた頭の中で笑つていた。

世間ではよくある話だが、実際にこつも陳腐に体感するとは。阿部はその初めての体験に、妙な感動すら覚えていた。それがまたおかしかつた。けれども、さすがに怒られた矢先に笑い声をあげては、彼女がまた気を悪くするであろう。先に出ていった彼女の体は寒さで震えていた。やはり、ここで吹き出しては彼女も自分もばつが悪い。気持ちを切り替えて、出勤の準備でもしよう。そう考えた阿部だつたが、その切り替えが上手くいかず、彼女の前ではおろか、通勤途中でさえ、思い出し笑いで顔がにやけそうになるのだった。

吐く息は白く、静寂に消えていく。三条駅から、少し北に離れた会社への途中、いつものように同僚の田岡と顔を合わせ、ともに社内へと足を運ぶ。阿部は早速、今朝の話をする。田岡は同意して笑

うが、途端、顔が歪んだ。もしやと、拳を自分の唇に押しつけると、手の甲に赤い点がつく。笑った拍子に、乾燥してひび割れていた唇がさらに割れ、そこから血が出ていた。それは当事者でなく、横にいる阿部でも分かるほど、はっきりと血が出ていた。阿部は彼を破顔させた事が申し訳なくなつて謝る。

「朝から彼女にも俺にも謝つて」

田岡がそう言つてからかうと、やはり笑つた時の傷の開いた唇が痛々しく、阿部は苦笑でしか返せなかつた。

五階建ての会社の中は暖房で暖かく、阿部の冷え切つた鼻や耳を攻めた。痛覚の鈍い耳はいいとして、鼻がむず痒い。阿部はたまらずこすると、寒さで赤くなつた鼻はさらに変色していつた。真つ赤なそれを田岡が指さす。指摘され、照れた阿部の顔を見ると、田岡は笑いながら部屋に入つていつた。阿部はばつの悪い顔で、それに続いた。

それじゃあ、と一声かけてお互の仕事机に向かおうとする、
「すみませんでした」

という叫び声を連呼する若い声。聞き覚えはあるが名前が思い出せない。阿部が声の方へ目をやると、それは係長のデスクだつた。その机の手前で、青いスーツ姿が平謝りしていた。それを確認する

と、

「有村君か」

安部は小声で呟き、自分の机に向かつた。有村は阿部と田岡の後輩で、屈託が無く人なつっこい男だつた。仕事の面でも、任された事は必ずこなす。その万能ぶりは阿部の課でエースと呼ばれるほどだ。阿部自身とは直接関わることが無く、挨拶程度の間柄だが、阿部は彼が謝つている理由を知つていた。阿部だけではなく、今日、有村が上司から注意を受けるであるう事は、周知の事実だつた。阿部は週の明ける二日前を思い出す。

阿部の勤める会社で、大きなプロジェクトがあった。殆どの部がその企画に携わり、阿部自身は直接、客との関わりはないが、バッカアップに大変な労苦をし、その疲れは三日経つてもとれなかつた。元々頑丈な自分が、ここまで疲れを引っ張るのは珍しかつた。

「自身の老いか」

などと笑つていた阿部だったが、あまりの氣怠さにせめて体だけでもと、企画終了の打ち上げの日に、合間に縫つてマッサージを受けに行つた。その打ち上げである。

マッサージを受けたせいか、気持ちよく酔いの回つた阿部は田岡と連んで、後輩で話の分かる女性を捕まえ、からかい半分の猥談で盛り上がつていた。酒の席といえど、さすがにこのよつた会話で大笑いする訳にもいかず、周囲を気遣う田岡の小声に耳を傾ける。すると、店の奥から怒鳴り声が聞こえてくる。阿部が怪訝そうに目をやると、声の主は有村だつた。顔どころか全身真っ赤の状態で、共に飲んでいる仲間内に、なにやら不満をぶつけているようだつた。内容は会社の愚痴だらうか、ろれつ回つていなその口調は、阿部のいる場所からは聞き取りにくかつた。耳の良い田岡がなんとか単語だけを拾い、今つきあつてゐる彼女の事を言つてはいるが、阿部に耳打ちした。

あの有村が酒の勢いがあるとはいへ、あんな風になるのは初めて見た。阿部がその珍しさに関心していると、

「あんだけ赤かつたら、酒焼けのせいか興奮しどんのか、ようわからんわ」

田岡が猥談していた女性と笑つていた。しばらく様子を観察していた三人だが、有村の聞き手が何かをしゃべると、有村が相手の襟首を掴みだしたので、慌てて男一人で止めにいった。両者はなだめるとすぐに落ち着いた。襲われた側が言うには、

「意見を求めてきたんで、有村の考えに反論をしたんです。そして急に怒り出して……」

田岡はため息一つ吐き、

「なんや逆ギレかい。無茶苦茶やな自分」

羽交い締めされたままの有村を揺らした。有村の体に力は入つて無く、田岡の言葉にもまた暴れ出すこともなく、ただ小さく頷いた。

「今日はもう、帰らした方がいいんぢやう？ 見てみい」

田岡は有村の体を揺すり、脱力しきつているというアピールを阿部にして見せた。阿部はそれに同感し、外にタクシーを呼んで有村を車に詰めて帰らせた。本人が大丈夫と言つたからだ。

酔つた後輩が暴れ回つて、その一日後。つまり休日後の今、有村は係長に怒られた後、周囲に謝り回っていた。確かに、かなりのひんしゅくを買つていたのだが、あまり関係の無い者にまで謝るその姿が、阿部には滑稽だつた。周りも阿部と同じ気持ちなのか、みながみな苦笑いを浮かべて有村を見るという後景があつた。

そうこうしている内に、阿部の順番がやつてきた。有村自身も仕事をしながらなので、阿部の処にやつてきたのは、彼が昼食のメニューを考えながらデスクの整理をしている最中だつた。

「田岡さんから聞きました。本来なら、阿部さんと田岡さんに真っ先に謝りにいくべきでした」

有村の謝罪をよそに、阿部はデスクの整理を続けた。有村が困つていると、彼の後ろから田岡が顔を出した。

「そんな田くじら立てるようなことでもないやんけ、他の連中見たく『別に気にしてない』とか、苦い顔で笑つたらええやん」

阿部は田岡の話を聞き終えると整つた机上を確認し、有村と田岡に顔を向けた。

「煮魚定食だな」

阿部の一言に一人は呆然とし、もう一方はにやけた。

「なんや、何を黙つてるかと思えば、おじつてもうつ昼飯考えとつたんかい」

「もともと、昼を考えてた最中にそっちが来たんだ。おまえも来たんなら、好都合だろ？」

田岡におどけて反論する。そんな阿部を鼻で笑い、

「ほんま、都合がええわ」

合理的だと言え、阿部が怒ったフリをすると、田岡がそのふざけたフリを笑い、唇の傷をまた開かせた。怒ったフリをしたのは、元々笑わせる というか唇が伸びる表情をさせるのが目的だった。今朝からかわれた仕返しに、田岡を軽く痛い目に令わようというイタズラだった。痛がる田岡の顔は、唇がすぼんでいるのに頬が上がつてている。不自然なその顔つきは、ひょっとこの面に似ていた。安部はその顔を笑い、今度は田岡が怒ったフリをする。安部は謝るが、まだ顔が笑っている。その両者のやり取りを見て、有村も笑つた。ひとしきり笑うと、

「で、どうするんだね有村君。我々は君の謝罪を気持ちでなく、形にしてもらいたいのだが?」

未だに痛がつている田岡を放つて、安部は話を戻した。回りくどい言い方をする彼を、有村は微笑んで、

「分かりましたよ。今日の昼はおどりますよ」
話の分かる後輩だと一人がほめると、話が分かりやすい現金な先輩でよかつたと、有村は一人を笑わせた。

会社から歩いて一分。阿部と田岡の通う食堂は、今日も座る場所がなかつた。十数分待つて、ようやく席に着くと、前もつて頼んだ注文がすぐ出てきた。あまりこの店に馴染みのない有村は、「座つてすぐに注文が来るつて、なんか変な感じですね」氣味悪がつてみせるが、一人にはこれが普通だったので、「合理的やん」

田岡の素の一言で終わる。

各々が料理を口に運んでいると、沈黙が苦手な田岡が、有村を呼んだ。

「この前、なんで暴れとつたんや。お前が酔つてああなるんは、初

めて見たぞ」

阿部は田を見張った。いくら何でも、こんな食事時に聞くような内容ではないだろう。会話のネタが無くなると、触れるべきではない話題にまで手を出す。田岡との付き合いは長いが、彼のこういう所が、阿部は今でも気に入らなかつた。しかし、いつもならこうで田岡をたしなめ、気を悪くしたであらう相手に謝るのだが、阿部は今回それをしなかつた。阿部自身、田岡の質問の答えに興味があり、己の常識とぶつかり合つていた。阿部が躊躇している内に、有村が言葉を投げた。

「今度飲みながらでもってワケにはいきませんかね？」

笑つて見せるその顔には、こんな時間にこんな場所では勘弁してほしいという、苦い印象を感じさせた。田岡はそれを分かつているのかいなか、

「ホンマか？　じゃあ今夜や」

「い！？　急ですねえ……」

いきなりの発言に阿部も驚いた。有村は困惑の浮かんだ笑顔という難しい顔のまま、携帯電話を取り出し、操作し始めた。電話をかける様子もなく、どうやら電話機の中にあるスケジュール帳を調べているようだ。少しだけ一人に田線を遭わせると、小さく頷く。今日は空いているというサインだった。

「ほんなら決まりや」

田岡はそう言つと、再び食事に入った。

阿部は困つた。この会話の流れと田岡の気性を考えると、自分も付き合わされるのは間違いないだろう。だとすると、愛情をとるか友情をとるかの一択となつた。前もつて決めていた彼女との今夜の約束を断る事はできない。逆に、急に決まったことで実際に誘われた訳ではないので、田岡を断つた方がいい。それどころか何も言わずに去つても、有村と田岡だけで行くのかと思ったとすれば、後の一言い訳としても通る。しかし田岡は根に持つとしつこい。しかも、こと後輩の相談がらみだ。有村を盾にして、しばらくは責めてくる

かもしけない。変わつて彼女は、どんな否でも一度怒れば、それで済ませてくれる。やはりどちらを選ぶべきか。

「有村、やつぱり今話さんか？」

田岡が急いた。もともと、食事中の沈黙が嫌で振った話題だったのでも、また会話が無くなるのが我慢できなかつたのだ。阿部の考へてる間はそんなに長くはなかつたが、田岡のしびれが切れるには十分だつた。有村はそんな田岡にあきらめの混じつた顔を見せると、了解の意を示す言葉をため息混じりの笑い声で伝えた。

彼の話は阿部と田岡の知つてゐた通り、付き合つていた女性に対してのことだつた。

「自分から言つのも何ですが、仕事と私生活の一つをちやんと両立できていました」

当然波乱もあつましたが、一言足して水に口付けた。有村の飲む最中、

「でも別れたんやつたら、両立できでないと同じじやうん?」

阿部は田岡の一言に、人の嫌がることを簡単に言つてのけるなど、感心を覚えた。だが、こいつの場合は自分が思つたことをただ外に出すだけで、相手の心境を理解した上ではないと、元々阿部が彼に思つていた評価によつてうち消された。

「そりなんですかね?」

阿部は有村が不満げに反論するかと思つたが、彼は意外にも田岡の意見を正直に受け止め、さらには言葉を求めた。

「彼女は別れ話の時に、上手くいきすぎて嫌だと言つたんですよ。

両立が上手くいっているはずなのに、彼女は離れた。田岡さんの言うとおりなのかもしれません。でも、納得いかないじゃないですか? 上手くいきすぎてなんて言われたら、消化できないでしょ?」

阿部は口を噤んだ。確かに憤りを覚える、どこへやつたらいいか分からぬ怒りだ。自分を責めるべきか、そんなことを思う彼女が間違つてゐると、責めるべきなのか。さらにはの一つはどうやらも正解につながらない氣もする。

「アホか、気づかんのかいな？」

阿部と有村の沈黙を目の当たりにした田岡が怒りを放つた。口調は激しくないが、荒く、けれども静かなものだった。阿部には重く響き、有村も同様のようだった。一人の視線が田岡に集まると、田岡は続けた。

「そいつはな、有村の彼女はな、自分の場所がわからんくなつたんや。なんでもこなしてみせる有村にも弱い部分がある。そう思うことで自分の居場所つちゅうのを信じてな。でも、お前さんはなかなか隙を見せよらへん。でも、お前の愛情は感じる。そいつ自身、板挟みになつとつたんや」

なんでこいつは目の前の人間の心は分からぬのに、会つたこともない人の気持ちは分かるのだろう。少し屈折した感想だが、阿部は田岡の評価を改めた。阿部にとつては目から鱗のような納得だつた。それは有村も同じだつた。憑き物が落ちたような顔になつてゐる。しかしながら、落ちすぎたのか、晴れすぎて真つ青になつっていた。

田岡はさらりと続けた。

「仮にこれが当たつたとしてや、その状態で有村が結婚話でもしてみい？ もしくはそれに近い事を言われてみいや。その押さえつけられた自分はどうなる？ 爆発したんやろ。だから、そんなこと言われたんや」

エース君の生んだ悲劇。田岡は最後にそう付け加えて有村を一警した。有村の首は根本から曲がり、もう少しでもげるのではないか。阿部が本気でそう思つほどに落ち込んでいた。

「よく、分かるな」

阿部はこの殺伐としてきた場を和めたく、不器用にもひきつった笑みで本心を茶化す。

「納得できる理由を作つてみただけや。こんなで落ち込むとしたら、本人に思い当たる所があるつて事やろ」

火に油を注いでしまった気分。水と思つてかけた阿部だったが、

のつべきならない状態に、もう何と言つたらいいか分からなかつた。会社から決められた昼食の時間ももう終わる。どうしようもないまま、一人は仏頂面、残る一人は頭を下げっぱなしで、店を後にした。

先ゆく田岡の後ろで、彼のお供のように並んだ二人の内、片方が口を開いた。

「オレ、思うんですよ」

何故、あの時手を振つてしまつたのか、そう続けた声は震えていた。本当はどうしたかったのだろう。振つた手がこっちに来るよう振つっていても、彼女はきっと戻つてはこないだろう。それは本人も分かつてゐるはず。それでも示したい何かが、さよならになつてしまつた。

阿部は居たまゝれない気持ちになつて、その後連絡は、と口に出そうとした。が、口は開いたままで、声は出なかつた。一度詰まつてしまふとなかなか言い出しきれず、二人の間に沈黙が流れたままでつた。

「無理矢理にでも、引き留めればよかつたのかな」

彼の独り言は、阿部の胸に切なかつた。

仕事も終わり、阿部は自宅のソファに座り込んでいた。しばらくすると阿部の彼女が入つてきて、一言一言交わすと食事の準備を始めた。

調理の音を聞きながら、阿部はつい口走つた。

「オレって上手くやつてる?」

手にした飲みかけのビール缶。その中身を回す彼に、彼女は調理の手を止める。

「何をよ?」

「いや、二人のカンケートていうのを」

どもつて聞き直す阿部の問いに彼女は考へ、

「そんなモン、自分で考えなさいよ」

冷たくあしらい、再び調理にはいる。阿部は彼女らしい答えに嬉しくなり、

「そうだな」

笑顔で返した。それから一分も経たない内に、何かあつたのかど、心配そうに尋ねる彼女が、阿部には妙におかしかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8269a/>

無責処（セメルトコロナシ）

2010年10月8日15時22分発行